

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

佑啓会との不思議な「縁」に導かれて

石神 敏明

「人の縁とは不思議なもので、かつて本機関紙に寄稿された現理事の堀口貴宏様が綴られたその言葉を、今、私は深く噛み締めています。私にとって堀口様は、千葉県社会福祉法人経営者協議会青年部会(以降、県青年部会)における二代前の部会長であり、公私ともに大変お世話になって大先輩です。その背中を追うように活動してきた私が、今こうして筆を執っていること、一緒に佑啓会の役員会に出席させていただいていることに、目に見えない強い繋がりを感ずるにはいられません。

常務理事の里見吉佑さんとの出会いは、二〇一六年の熊本地震災支援活動でした。東日本大震災以降、継続的な被災地支援をおこなってきた県青年部会において、吉佑さんにとつてこれが初めての県外企画への参加だったと記憶しています。私たちは益城町でのがれき撤去や熊本市内での片付け、ゴミ出しボランティアに汗を流しました。一日目の過酷な作業後、当時の藤代部会長の学友が営む郷土料理屋での宴席。慣れない現場で疲れ果てていたはずの吉佑さんが初参加の緊張もあつてか、一生懸命にお

酒を飲まれていた姿が目には浮かびます。実を言えば、私自身もその夜は存分に杯を重ね、情けないことに翌朝は動けなくなるほど沈没してしまいました。そんな私を尻目に、吉佑さんは翌日もしっかりと支援活動に励んでおられました。あの時、被災地の厳しい現実に向き合い、一緒に汗を流し、夜には泥臭く盃を交わし合った経験が、今の私たちが気兼ねなく語り合える関係の原点となったのではないかと、今改めて感じております。二〇一七年、吉佑さんの結婚式に参列させていただいた時のことです。県青年部会の先輩方と共に会場に足を踏み入れた私は、そこで佑啓会という組織の「真髄」を目の当たりにしました。披露宴の最中、突如として「馬のお面」を被った集団が現れ、会場全体を取り囲んだのです。それは佑啓会の職員の皆様による、愛に溢れた全力のサプライズ演出でした。馬の集団の見事な一体感に、少しだけ空回り気味の熱量に思わず吹き出しつつも、同時に言いようのない温かな感動を覚えました。何より、次代を担う吉佑さんが、これほど

までに職員の方々から慕われ、愛されているのだという事実、胸が打たれる思いがしたのです。



私自身、祖父が設立した社会福祉法人の三代目として日々奔走しておりますが、あの時に感じた「職員が自発的に動き、組織を盛り上げる力」は、自分にはまだ足りない、目指すべき一つの理想像として心に深く刻まれました。吉佑さんと深く語り合ったのは、群馬県への視察研修の帰り道でした。複数の車両に分かれての移動となりましたが、私は吉佑さんと一緒にワゴン車に乗り込むことになり、確か私がハンドルを握り、彼が助手席に座ったと記憶しています。他の参加者が疲れから眠りに落ちる中、車内で私たちは様々な話をしました。私の法人がどのような経緯で立ち上がったのか、どんな職業を経験してきたのか、今どのような課題に取り組んでいるのか。はたまた尊敬する偉人の話など、話題は尽きませんでした。その中で特に

盛り上がったのが、人気漫画『キングダム』の話です。私も知人から全巻を借りて読み進めているタミングであり、互いにお気に入り漫画だったようで、会話のテンポは一段と上がりました。

吉佑さんは、作中に登場するキヤクターに自身の法人のスタッフをなぞらえ、「私の法人には、羌痲(きょうまい)のような凄まじく強い女武将がいるんです」「王騎(おうき)のように圧倒的な存在感で無双するスタッフがいるんです」次々に主要キヤクターの名前をあげながら(他にも多くの武将が登場したと記憶しています)、その言葉の端々から、彼がどれほどスタッフを信頼し、その層の厚さを誇らしく思っているかが伝わってきました。年下ではありますが、一人の経営者として、彼の「人を信じる力」の深さに、改めて強い敬意を抱いた瞬間でした。

その後、私が千葉県青年部会の部会長を務めることとなった折、吉佑さんから「佑啓会の評議員になつてほしい」との依頼をいただきました。私のような者が、これほど大きな法人の評議員を務めるなどおこがましいのではないかと当初は戸惑いましたが、彼からの真っ直ぐな言葉と信頼に応えたいという思いから、大役をお引き受けすることになりました。就任前、里見吉英理事長との会食にお誘いいただき、一緒にさせていただきました。理事長は長年にわたり、全国の業界団体の役員を数多く歴任され、日本の福祉会を牽引してこられた偉大な先輩です。その圧倒的な実績とオーラを前に、当時は非常に緊張して席についたことを懐かしく思い出しま

す。評議員として佑啓会の役員会に参加させていただくようになり、議事を中心となつて進行される里見吉英理事長のリーダーシップからも、毎回多くのことを学ばせていただいております。初めて参加した当時は、その重厚な雰囲気は大変緊張したことを覚えていますが、そこで目にしたのは驚くべき光景でした。役員会において、事務局の説明の後に必ず理事長自らご自身の言葉を添え補足し、事業の細部に至るまで魂を込めて語られる姿は、「大組織のリーダーこそ、誰よりも現場を熟知し、深く関わっていなければならぬ」という真理を私に教えてくれました。まさに、大きくなる組織を率いるリーダーの真の在り方を、私は毎回の会議を通じて肌で感じさせて



千葉県社会福祉経営者協議会 県外視察 in 秋田 岩手

吉佑さんもまた、全国社会福祉法人経営青年会の役員として、その社交性と実行力で今や全国から

引っぱりだこの存在です。現在、千葉県からは「つながり創造委員会」の網島委員長や、「未来経営実践委員会」の里見副委員長が選出されており、また、県青年部会の副部会長をはじめとする委員の皆様も、毎回、全国青年会の研修会に多数参加してくださいありがとうございます。そのおかげで、全国における千葉県の存在感は非常に大きくなっており、千葉県青年部会長としてこれほど誇らしく、心強いことはありません。

また、佑啓会のスタッフの皆様も各地で行われる研修会にいつも多く参加してくださいありがとうございます。研修後の酒席で親しくお話をさせていただきますが、あなたも高い帰属意識を持ち、皆が同じ熱量で自法人の未来を明るく語る姿に接するたび、佑啓会という土壌の豊かさを実感せずにはいられません。

結びに代えて佑啓会は、人間味あふれる温かな場所でありながら、常に新しいことにチャレンジし続ける情熱を持った組織です。吉佑さんには、これからもその豊かな感性と実行力で、佑啓会のみならず、日本の福祉業界全体の未来を、私たち仲間と共に切り拓いていってくださることを願ってやみません。

社会福祉法人佑啓会の更なる飛躍と、里見理事長をはじめ職員の皆様の益々のご健勝を祈念いたしまして、私からの寄稿とさせていただきます。

(社会福祉法人佑啓会 評議員)

二十歳を迎えて

山下 智子

息子が二十歳になったと聞くと、ひとつ区切りが来たような気もしますが、正直なところ、まだまだ実感はありません。それでも、これまでの時間を振り返り、自分の中で「よくやってきたね」と、そっと声をかけました。

現在、息子はふる里学舎五井の生活介護でお世話になっています。

息子は、日常の会話は少しかる程度で、言葉の理解もゆっくりです。自分の思いをうまく言葉にできず、苛立ったり、感情が大きくでてしまうこともあります。部屋で一人で過ごしている時には、独り言が増えたり、急に怒鳴ったりすることもあり、親として戸惑う場面は今も少なくありません。



成人式新年会での1枚

また、外に出るとそのまま行ってしまうことがあり、安全面を考えて靴の中敷きにGPSを入れるなど、日々試行錯誤しながら暮らしています。

十年前、初めて原稿を書かせていただいた頃と比べると、できることも増えましたが、悩みがなくなったわけではありません。年齢とともに悩みの形が変わり、考えることも増えてきたように感じています。

ふる里学舎五井では、施設長をはじめ、本当に多くの職員の方にお世話になっています。中でも、日常の子育ての悩みで不安になったときに

話を聞いていただいているのが菌田さんです。話を聞いてもらい、少し気持ちが軽くなったり、「しゅんくんなら大丈夫ですよ」と声をかけてもらい、背中を押してもらったことが何度もありました。顔を見るだけで、ほっとできる存在です。



また、昨年、息子が利用者さんとの間でトラブルを起こしてしまったことがありました。その際、間に入ってくださったのが、職員である宮木さんでした。以前からお世話になっていましたが、じっくりお話するのはその時が初めてでした。

宮木さんとお話する中で、息子に寄り添い、人生の伴走者として関わってくださっている方なのだと感じました。その姿勢に、親としてとても心強さを感じたことを覚えています。

振り返ると、ふる里学舎全体の皆さんに支えられ、押し上げてもらいながら、私たち家族はなんとかここまで来ることができました。息子は家族だけで育ててきたのではなく、関わってくださった皆さんの方と一緒に、ここまで育ってきたのだと今は感じています。

(ふる里学舎五井 保護者)

王座奪還

大高 賢人

令和八年一月十五日、千葉ポートアリーナで開催された大会での出来事は、私にとって今年度最も大きな出来事となりました。

まず、私が所属するバレー部についてご紹介いたします。当部は法人内でも随一の歴史を誇り、法人設立とほぼ同時期に始動いたしました。

当初は千葉県知的障害者福祉協会主催の「男女混合九人制バレーボール大会」への出場に向け、経験者が不在の状態からのスタートだったと聞き及んでいます。平成十四年頃から徐々に経験者が増え始め、今年度の部員数は三十名を数えるまでになりました。幸いなことに、近年も若手の経験者が毎年複数数名入部しており、活気に満ちています。

練習は毎週火曜日の夜、基礎からチーム練習まで、特に「チーム力の向上」を活動の主眼に置いて励んでいます。かつては少数の事業所による活動でしたが、現在は十一の事業所から職員が集まり、切磋琢磨を続けています。



我々が出場している年間行事には、三法人交流会(大久保学園・菜の花会)の皆さまとの親睦や、協会の地区大会・県大会があります。今年で三十回目を迎えた協会大会において、我々佑啓会は千葉地区大会で毎年優勝という成績を収めてまいりました。

県大会の軌跡を振り返りますと、平成二十八年度(第二十三回)の初優勝を皮切りに、令和元年度、そしてコロナ禍を経て令和四年度に優勝を果たしました。しかし、令和五年度は準優勝、令和六年度は宿敵である大久保学園に惜敗し、非常に悔しい思いを重ねてまいりました。

今大会のレギュラー陣には、県内屈指の強豪である習志野高校でセッターを務めた職員や、大学まで競技を継続した職員が四名加わりました。そこに過去の優勝を経験した熟練メンバー四名が合流し、正に「過去最高」と呼べる布陣で臨むことができたのです。

本大会は各地区代表の全十六チームが出場し、頂点には四度の勝利が必要でした。トーナメントでは前年度の優勝・準優勝チームが両端に配されるため、順当に行けば準決勝で前年度王者と対戦する組み合わせとなりました。

一回戦の佐原聖家族園、二回戦の千手会との試合では、着実に勝利を収めることができました。続く準決勝は、前年度王者の野栄福祉会との対戦です。相手のエースによる強力な攻撃にさらされましたが、粘り強くボールを繋ぐことで勝利を掴み取りました。

そして迎えた決勝戦。相手は長年のライバルである大久保学園です。個々のプレーが極めて安定しているチームであり、序盤は一進一退の拮抗した展開となりました。しかし、中盤から徐々に点差を広げ、最後はエースの力強いスパイクで勝利を決めることができました。

今回の勝因は、例年以上に「繋ぐ力」が安定していたことにあります。また、何より部員が練習に参加できるような配慮し、送り出してくださいました各事業所の皆さんの協力があつたからこそ成し遂げられた結果です。

大会後の懇親会では、優勝の喜びと共に過去の思い出話にも花が咲き、勤続十三年の私にとっても「過去一番」と言えるほどの盛り上がりを見せました。



今年度はバレー部に限らず、野球部(六年連続優勝)、フットサル部(二連覇)も協会の大会で優勝を飾るといふ快挙を成し遂げました。この勢いに続き、バレー部も連覇に向けた盤石の体制を築くべく、さらなるチーム力の向上を目指してまいります。現在は福祉大会のみならず、市民大会への出場機会も増やしており、チームは今後さらに発展していくと確信しています。私自身、レギュラーとしてコートに立てる機会はまだ少ないかもしれませんが、これまでの経験を後進に伝え、次世代へバトンを繋ぐキャプテンとして貢献していく所存です。

来年度に向けては、里見理事長より優勝記念の「新ユニフォーム作成」という嬉しいお話をいただきました。新しいユニフォームを身に纏い、再び頂点に立つために、日々の練習に邁進してまいります。

(ふる里学舎 支援員)

佑Tube



編集後記

新入職員四十五名と共に駆け抜けた令和七年度。船橋やパン工房という新たな事業が始まりました。次年度は千葉、君津での新規オープン控えています。拡大する佑啓会の勢いそのままに、次の一年もまた、瞬間に過ぎゆく充実の年となるでしょう。

(支援員 栗川克明)



佑啓会の福利厚生の一つ部活動 各部活動の代表者が魅力をお伝えします!